

エッセイ

新橋界隈の変遷④

瀬崎 明 (会員)



徳川時代、江戸城の外堀に通じる新橋は舟運にも恵まれて商いの要衝としての役を担っていた。代が明治に替わってからは外国貿易が盛んになり、異文化の移入地としていっそうの隆盛を誇った。ここに水運をもたらす荒川は江戸川、渡良瀬川、利根川などと流れを併せて関東平野を潤してきた。奥秩父に源を発した荒川は岩淵赤羽で隅田川に分かれる。その分岐点から20数km下流の河口に新橋・汐留がある。江戸期には隅田川の下流は大川と

呼ばれ、池波正太郎などの時代小説ではその名が頻りに登場する。舟運の便が良い隅田川一帯は江戸期より賑わうところであった。しかし、荒川は名にし負う暴れ川であり昔より洪水が絶えない。令和元年10月22日の今上天皇パレードの延期をもたらせた台風19号は、強風と同時に異常降雨による河川の氾濫を各所で引き起こし、被災地の苦難は如何ばかりかと心が痛む。昔より水害に悩まされている隅田川流域だったが幸いにして氾濫の難を逃れた。過去に例を見ない2倍、3倍の想定外の降雨にさらされてなお洪水発生を逃れたのは、僥倖だけでなく長年の治水事業の成果もある。隅田川が氾濫すると銀座、新橋だけでなく大手町を含めた首都中枢が水に

浸かり、首都機能が長期にわたる麻痺状態になる恐れがあった。江戸時代から現在に至るまで、荒川水系の治水事業は巨額の投資がなされている。これも首都の中心地を災害より守る施策であり、我々協会員を含めた地域住民の安全にもつながっている。治水豊かな新橋界隈で多くの有名人が誕生しているが、文人だけでも数えきれないほどである。明治に生まれて早世した著名な作家に目を向けると、内幸町で生まれた樋口一葉、築地生まれの芥川龍之介、芝大門生まれの尾崎紅葉などがある。樋口一葉は紙幣の肖像画となった女性の2人目だが、最初の女性肖像画は神功皇后であり実在すら定かではない。

一葉が近代女性として最初に5千円札の肖像画となり、その後津田梅子を選ばれたのはお札ではあるが女性登用の象徴のようである。喜ばしい感じがする。しかし、いざいざ5千円であることにはいささかの疑問が残る。紙幣になった一葉であるがお金の苦労は絶えなかったようである。官吏であった父を失い、兄は寄り付かず母妹を抱えた一家の家長として商売にも手を染めたが上手くゆかず、小説『たけくらべ』で森鷗外が絶賛するなどの名声を得たが結核のため24歳で早世している。

紙幣をテーマとしたが、肖像とは関係ないにしても金を主題にした尾崎紅葉の代表作『金色夜叉』は外せない小説である。金を敵とした主人公の『今月今夜のこの月……』のセリフや熱海海岸の「お宮の松」は知らぬ人はいないほどである。紅葉は大学時代より読売新聞に勤め、大学を中退し読売新聞の作家として名を挙げ文壇の重鎮として活躍したが、胃癌により37歳で世を去っている。

芥川龍之介と紙幣のつながりだが、いささかこじ付けである。龍之介の出生地・築地は父・新原敏三が支配人を務めた牛乳販売業耕牧舎地であった。この事業は新1万円札の肖像となる渋沢栄一のものであった。